

議第5号議案

来年度の高校入試に中学校英語スピーキングテスト（ESAT-J）を活用しないことを求める意見書

上記の議案を提出する。

令和5年6月21日

提出者

東大和市議会議員 早川 美穂

〃 上林 真佐恵

来年度の高校入試に中学校英語スピーキングテスト（E S A T－J）を活用しないことを求める意見書

英語スピーキングテスト（以下E S A T－J）は、タブレットから流れる問題に答えを録音する形で行われ、フィリピンの事業者による採点後に、結果が入試の総合点に20点満点で加算され合否判定に使われるものですが、都立高校入試への活用をめぐっては、保護者や教員、専門家など多くの関係者から、公平性、公正性、透明性の担保ができないと中止を求める声が広がっていました。

8万人の生徒の点数を短期間で正確に行えるかどうかの保障がないこと、生徒が自分の回答の採点結果を情報開示請求することもできないこと。100点満点のE S A T－Jを入試に活用する際に20点に換算するが、6段階の得点域で分け4点刻みに配点することにより、テストが1点違いでも入試では4点の差に拡大する場合が生じること。調査書の内申点は、主要教科（国語、社会、数学、理科、英語）の満点が23点なのに対し、英語の1技能であるスピーキングが20点となり、英語だけ合計43点になるというバランスを欠いた配点であること。不受験者に対しては、同じ高校を受験した学力テストの結果が同程度の10人前後の結果から算出した平均点が付与されることから、得点順位が入れ替わる逆転現象が起こり得ること。ベネッセが運営する民間試験G T E Cと酷似しており、都内公立中学校でG T E Cを実施している自治体の生徒はE S A T－Jでも高い得点を出せる可能性があること。

こうした多くの問題点を抱えたまま、2022年11月27日にE S A T－Jが実施されましたが、「英語スピーキングテストの都立高校入試への活用中止のための都議会議員連盟（英スピ議連）」によるE S A T－J実施状況調査結果によれば、「前半の人たちの回答が丸聞こえだった」、「前半組が終わった後、トイレ等で問題が流出した」、「イヤーマフをつけても前後左右の人の声ははっきり聞き取れた。近くの席の人の解答をそのまま回答すれば点が入る状況だった」など、前半組と後半組の情報遮断不全92件（46会場）、「イヤーマフ越しに他の受験生の解答音声がかえった」166件（78会場）、「録音確認の際に周りの人の声が録音されていた」55件（35会場）など、入試の大原則である公平性を担保できない重大トラブルが多数発生しました。

さらに全員分の音声データを聞き直した結果、8人の解答の音声の一部が正しく録音されず無回答と認識され、誤って低く採点されていたことや、「中学校学習指導要領

に基づく内容とする」としていながら、実際にはそれを逸脱する問題が出題されたことも明らかになりました。

東京都教育委員会は、英語スピーキングテストは、学習指導要領の英語における書く、聞く、読む、話すの四技能のうち「話す」ことを評価し、授業改善に役立つようアチーブメントテストとして行うとしていましたが、人間とのやり取りではなく機械に向かって一方的に説明する問題で、英語でのコミュニケーション力をはかることができるのか疑問です。結果についても総合得点のみで設問ごとの点数が示されないため、なぜその点数なのか分からず、正しい採点だったのかどうかの確認もできず、アチーブメントテストとしても入試としても成り立っていない状況です。

しかし東京都教育委員会は、E S A T－Jの結果を今年度入試でも活用し、さらに1・2年生にも広げようとしています。

公平・公正さが確保できないテストを、中学生の将来の進路に関わる極めて重要な都立高校入試の合否の判定に使うことができないのは当然のことであり、東大和市議会は、東京都教育委員会に対し、来年度の高校入試におけるE S A T－Jの活用を中止することを求めます。

以上、地方自治法第99条の規定により意見書を提出する。